幕末の西多摩

明治維新150年記念特集

黒船来航から徳川幕府崩壊という幕末の混乱と、江戸に近い西多摩地域も無関係ではいられなかった。西多摩は幕府の天領（直轄地）も多く、財政難の幕府への献金、将軍上洛や長州征伐の人や物資を運ぶ助郷役、千人同心としての従軍など、西多摩の人々もさまざまな役割を果たした。今年は明治維新150年の年、故郷の治安を守るため組織された「農兵」を中心に幕末の西多摩を特集する。

（小峯佐知子）

我が村を守れ！

幕末に農兵隊誕生

農兵とは江戸時代末期に国防や治安維持のため、通常は農業に従事している農民を非常時に兵士として用いる制度のこと。

多摩地域の天領も治めていた名代官・伊豆国韮山代官の江川英龍は、緊急時の派兵を各藩が担う海岸防備体制への不安から、幕府へ韮山代官領の農民を訓練し、危急の際に動員する「農兵制度」の採用を何度も訴えた。部隊行動を中心とする西洋の戦術には、身分意識が強く弱体化した武士より、頑健な農民の若者を訓練したほうがより有効で、幕府の経済的負担も少ないと考えたためだった。

幕府は身分制度を揺るがす農兵制度に難色を示し続けたが、英龍は代官所近くの金谷村の農民に洋式銃の訓練を施していた。嘉永2（1849）年にイギリスの軍艦が下田港に居座った時、英龍は訓練した金谷村の農民40人を武装させ率い、艦長との談判に成功。農兵の実用性に自信を深めたという。

同年12月、幕府は大名へ海防強化令を出し、庶民にも「国防は国民全体の問題、国恩に報いるためにも身分に応じた負担をするよう」命じたものの、農兵採用についてはなかなか認めなかった。文久3（1863）年、韮山代官支配地に限り農兵の採用は許可されたが、英龍はその8年前に病死。その跡を継いだ英敏も早世してしまい、その弟の英武の代になっていた。

その後、韮山代官領以外の天領や諸藩でも、兵力不足を補うため農兵採用が相次ぎ、類似の幕府直轄軍として集められた「兵賦（へいふ）」や、江戸では火消しなどが多く志願した「町兵」なども集められた。しかし、訓練度の高さ、装備の充実度で韮山代官領の農兵は抜きんでていたといわれてる。

のちに、幕府という設立母体を失った韮山代官領の農兵は、新政府から東征軍として出兵要請を受けたがなんとか断り、やがて解散。多摩地方では明治3（1870）年4月に貸与されていたゲベール銃を韮山県に返納した。その2年後、明治政府は徴兵の詔を発布。人々は故郷のためではなく、国家のための兵士として徴集されることになる。

▲狭山池ほとりには「常夜燈」（高さ5㍍）も。慶応元年、当初は日光街道と残堀川が交わる場に建てられた。幕末の不安の中、燈明を灯して旅人の道標とするとともに天下泰平、村内安全を祈った。

当時の西多摩は

嘉永6（1853）年6月のペリー来航は、幕府だけでなく一般の人々にとっても大きな衝撃を与えることになった。西多摩にも黒船来航は早々に伝わったようで、深沢村（現あきる野市）の旧家深沢家の土蔵からは、自ら黒船を見、スケッチしたと思われる黒船の絵が発見されている。

その後、西多摩の村々は幕府の直轄地（天領）や、旗本が治める地域だったこともあり、財政難に陥っていた幕府への献金を度々申し付けられ、街道沿いの村では人や荷を運ぶ「助郷」の役目を果たしたり、裏方として徳川幕府を支えた。

その後開港し、外国との貿易が始まると、欧州の生糸の主要産地・イタリアとフランスで蚕の病気が流行したこともあり、質の良い日本の生糸の需要は急激に増加。原料糸が輸出されるため特産の「黒八丈」の生産に支障が出た秋川流域では、関東取締出役に「貿易港と近い立地から直接その影響を受ける」と生糸交易中止の嘆願書を提出している。しかし、生糸の値が急上昇するのを見て、人々の態度は一転、輸出用の生糸の増産へと方向転換した。

このように当時の人々は、案外たくましく、すぐに外国との貿易へ関心を持つようになり、名主の中にはアメリカや各国の通商条約と貿易章程の締結文の全文の写しを持つ者もあった。

【江戸から疎開者も】

江戸の町では黒船の出現に危機感を覚えた旗本や御家人らが、武器を買い集め、武器不足を招いた。また、銭相場、物価も上昇し江戸市中は不況に陥り12月には強盗が横行する事態に発展した。不安定な情勢に武士も庶民も江戸近郊に家族や財産を疎開させようとする者が出始めたため、荷物を運搬する人足の賃金が一気に高騰したといい、見通しの立たない状況から疎開を希望した者が多かったことが窺える。

多摩地域は江戸に近い立地から避難者も多かったといい、文久3（1863）年に14代将軍家茂の上洛が決まり江戸市中が驚き騒然となると、現在の福生市熊川を知行していた旗本・田沢氏も、名主に家族らの避難の手配を頼んだという。

【新政府軍と西多摩】

徳川幕府が終焉を迎え、慶応4（1868）年になると関東取締出役の見回りもなくなり、西多摩でも盗難や凶悪事件が発生するなど治安が極度に悪化。4月18日に新政府軍が江戸に入城し、井伊家の屋敷に新政府軍参謀の宿舎があると知った拝島・五日市・八王子などの寄場組合の村役人たちは、「新政府軍に治安を確立してもらい、旧関東出役のように村々を巡回してほしい」と連名で願い出た。

しかし、新政府軍に村々の面倒をみる余裕はまだなく、対応した参謀稲葉某は村役人らに「悪党が村に押し入って、お前たちが悪党を鉄砲で撃つなり、突き殺すなりしても咎めはしない」、つまり自分たちの力でどうにかするよう返答したという。そう言われた村役人らの落胆ぶりは想像に難くない。

西多摩の農兵

多くの地域が韮山代官領となっていた多摩地域でも、農兵は文政の改革で設置された寄場組合を単位に、日野、五日市、拝島、田無など組織され、武蔵・相模国で415人を動員する計画が立てられていた。

その多くが身元が確かな豪農の次男三男で、装備や訓練の費用は村々で負担することになった。幕府の赤字財政で江戸湾の台場建設、農兵らの訓練にも使われた芝新銭座の大小砲習練所の建設など幕府への献金が相次いだ中にあっても、治安悪化に悩まされていた豪農や豪商は農兵に期待し進んで寄付を行った。そんな当時の人々の世情への不安は、農兵制度開始に先立ち、多摩の村々が幕府に「村落防衛のためゲベール銃100挺を拝借したい」と願い出ているところからも読み取れる。

武蔵国では同年11月、農兵の取り立てが命じられ、田無村に出張した代官所手代らに、各村の名主が農兵の名前や献金額などを記した書類を提出。元治元（1864）年9月には江戸芝新銭座で、高島流砲術を身に着けた手代らの指導で農兵の訓練を開始した。

将軍上洛の途上、将軍家茂が韮山の農兵の訓練を見学し称賛される一幕もあり、その様子はすぐに「農兵の誉れ」として武蔵国の農兵らにも伝えられた。

多摩地方では元治2年に農兵の調練を開始。瑞穂では狭山池近くで訓練をし、大工や屋根職人に頼み小屋や標的を作った。後にそれを記念し、狭山池公園に「調練橋」と名付けられた橋がかけられ、同橋の説明板によると「79人が訓練を行い、箱根ケ崎村と石畑村から各4人、殿ヶ谷村から2人が参加していた」とある。

あきる野市では山田堰のあたりで訓練を行い、18歳～40代の者が訓練に励んだ。彼らは始めはこわごわと銃を扱っていたが、慣れてくると旧式のゲヴェール銃ではなく新式の銃を使いたいと求めるようになるなど、故郷を守るという自分たちの役割に積極的になっていったという。農兵らは各隊ごとに、そろいの制服や旗を作り、徳川家の家紋の入った銃を貸し与えられていた。

狭山池公園の調練橋

幕末最大「武州世直し一揆」西多摩へ

農兵「秋川隊」出動！

農兵の活躍①

慶応2（1866）年、開港の影響や長州征伐軍への物資買い上げだけでなく、春からの異常気象で諸物価はうなぎ上りとなった。それは、質に出すものすらなくなり困窮した民が暴動を起こす事態を招き、その数は全国で40件に上るほどだった。幕府の天領で起きた騒動も多く、長州征伐で幕府軍を不利にした原因のひとつともいわれているという。

5月28日には江戸・品川、29日には芝・三田で打ち毀しが起き、その翌月、6月13日に西多摩地域も巻き込む、幕末最大の農民一揆「武州世直し一揆」が発生した。7日あまりで鎮圧された同一揆は、現在の埼玉県名栗村の貧しい農民が中心となり、現在の青梅市の成木村なども合流。広範囲で同時多発的に起こり武蔵国・上野国の202村、参加人数は10万人以上だった。

豪商らから米の安売りを拒絶され、一揆を起こした人々は飯能・所沢・寄居などで520軒の豪商や豪農を打ち毀し、青梅や福生でも被害がでた。この世直し一揆事件で、治安維持への期待を背負った西多摩の農兵も活躍することになる。

一揆の首謀者は15～60歳までの男子は斧やのこぎりを持って「世直し」に参加するよう呼びかけ、「米穀商は米を安く売ること」「質屋は質物を無償返還すること」「高利貸しは借金証文を返還すること」「村々は人足を提供すること」を求める廻状を一斉に各村へ送り、要求に応じない村は焼き払うか打ち毀すと強硬な姿勢をとった。その一方で、「人身に少しも危害を加えない」「金銭をかすめ取ってはいけない」など厳重な規律を設け、守らせていた。

一揆勢の本隊は所沢方面へ向かい、西多摩へ向かった一隊は青梅で4件打毀し、瑞穂・福生方面、日の出・あきる野方面の2方向に別れた。瑞穂では名主が話をつけ事なきを得たが、福生では打ち毀しが行われ、その後八王子へ向かった一揆勢は、八王子宿の農兵らと多摩川を挟んで交戦、夕方に一揆勢は敗走した。

西多摩のお代官様

カリスマ代官・江川英龍

江川家は鎌倉時代から続く名家で、代々伊豆国韮山代官を世襲。武蔵国の天領だけでなく、伊豆、相模など関東近郊に支配地を持っていた。

江川英龍（1801～1855）は、天保6（1835）年に韮山代官に就任。貧民救済に努め、産業を奨励し、海外事情にも通じ早くから国防への問題意識を持つ名代官として、領民に「世直し江川大明神」と慕われた。

民政では小学校の銅像にもなった二宮尊徳を招いて農地を改良、天然痘の種痘技術が伝わると積極的に領民に接種をすすめ、役人の不正を厳しく取り締まり、自身も質素倹約を心掛け、さらには領民の暮らしを調査するために行商人のふりをして領内を巡ったりと活躍をしている。

国防の面では英龍の領地は海岸線に面し、異国船も多く出没したため西洋砲術の専門家・高島秋帆（しゅうはん）に学び、幕府に大砲鋳造、軍艦建造、西洋砲術や農兵の採用を訴えた。ペリー来航後には、幕府から認められ海防掛勘定吟味役格に任じられ、品川沖に台場を建造。世界遺産韮山反射炉建設を進言し認められている。しかし、英龍は志半ばで肺炎にかかり死去し、反射炉の完成、農兵採用の実現は息子の代になってからのことだった。

ほかにも英龍は韮山塾という私塾を開き、全国の若者が集まり、その中には、幕末に活躍した桂小五郎、大山巌、橋本左内などがいた。英龍は多摩の有力者に自警活動をすすめ、そのため天然理心流への入門者が増え、それが後の新選組結成につながったともいわれている。

〔略年表〕

1853	ペリー浦賀来航
1854	日米和親条約
1858	安政の大獄、日米修好通商条約
1859	神奈川・長崎・箱館開港、貿易開始
1860	桜田門外の変。横浜開港
（～1865）	米価高騰で農民一揆頻発
1861	和宮将軍家降嫁、現瑞穂町の村々に助郷を命じる
1863	将軍上洛、西多摩の村々にも献金を命じる。韮山代官支配地で農兵採用
1864	蛤御門の変、第1次長州征伐
1865	多摩地域で農兵の訓練開始。幕府直轄領で兵賦の徴発開始
1866	薩長同盟。第2次長州征伐、韮山代官農兵武州世直し一揆動員
1867	大政奉還。12月韮山代官農兵、八王子で薩邸浪士隊を阻む
1868	鳥羽・伏見の戦、明治改元、江戸を東京と改称
1869	江川英武（江川英龍の子）、韮山県知事に

〔参考文献〕各市町村史、『東京都の歴史』『幕末の農兵』樋口雄彦著、『幕末の世直し　万人の戦争状態』須田務著、『悪代官はじつは正義の味方だった』山本博文著など

平成30年9月1日(土)～11月30日(金)

「ガスと暮らしの安心」運動

正しい使用で安全快適な暮らしを実現！ ガス事故のない社会をめざす

❶ 古いガス機器は安全装置が付いていないものも。安全型に取り換えよう

ガス機器は古くなると部品が劣化するため、火災や事故を起こす恐れがあります。不完全燃焼や空焚きなどを検知し、運転を停止する安全装置などが付いたガス機器に早めに取り換えましょう。

❷ 万が一に備えて、ガス警報器を設置しよう

ガス漏れや一酸化炭素の発生を知らせるガス警報器は、交換期限があります。今一度、ガス警報器の設置場所を確認し、期限が過ぎていれば交換しましょう。

24時間の緊急体制で安全・安心！！

武陽ガス株式会社
東京都福生市本町17番の1
本　社(042)551-1621(代)
緊急時(042)552-0156
http://www.buyo-gas.co.jp

青梅ガスグループは、人と自然が共生するこの町で、「ガスと暮らしの安心」運動を実施しています。

omegas http://www.omegas.co.jp 青梅ガス
TEL 0428-31-8111

OG service 株式会社オージーサービス
TEL 0428-31-8416

SMK 清水燃料株式会社
LPガス・灯油・各種燃料・ガス器具・リフォーム等
お気軽にご相談ください
（営業本部）
青梅市東青梅4-19-7　0120-565-205
http://shimizu-nenryo.co.jp